

伊藤家蔵データ

- ・木造2階建て
- ・建築面積：約20㎡
- ・延床面積：約40㎡
- ・壁 厚：約20cm
- ・乾 蔵：敷地の北西隅に配置
- ・平 面：4間×5間
- ・棟 方 向：東西
- ・出 入 口：南側平入
- ・備 考：内部には様々な調度品が保管
- ・付 録：実測資料

土壁に塗って何度か応急処置をしていました。なかなか上手にできないので、何年かするとバサッと落ちてしまうんですが。

蔵の価値を再認識

困るのは、たまたま蔵があるというだけで金持ちだと思われてしまうことです。うちの蔵にはいわゆるお宝の類はなく、いたって儉しく暮らしているのに、「大判小判が眠っているに違いない」というようなことをよく言われます。勘繰られたり、妙に羨ましがられたり、難儀なことです。

長年、単身赴任先と住吉を行ったり来たりでの生活でしたが、3年前に定年になり、ほちほち蔵の中の「堆積物」を整理していこうと思っているところです。こうして蔵について取材を受けたり、お話を伺うようになって、私自身、蔵の価値を再認識している面もあります。DVD「住吉の蔵」の撮影時には、それまで「もう捨てよう」と思っていた古いアイロンやアイスクリーム製造機にスポットがあたりました。持ち主としては意外で驚きましたが、価値を見出してもらえるのであれば、それはそれでうれしいことですし、お役

に立てれば何よりと思っています。

位置的には通りに面しており、蔵が邪魔になって間口を広げられないなどの不便はあるものの、今の私どもの暮らしに蔵は欠かせないものなので、今のところ潰そうと思ったことはありません。が、正直なところ、地域のために蔵を残そう、という思いにまでは至っていません。今後、「住吉の景観」として蔵を残していこうという流れができてくれば、協力していければと思いますが、町並みとして蔵を残すのであれば、公の管理にした方がいいのかもしれないですね。



伊藤家蔵

蔵職人に聞く（屋根編）

住吉蔵部／竹山通明・材寄法子・曾我部千鶴美

本瓦葺き屋根の変遷

住吉の蔵には、本瓦葺き屋根が多く見られる。「瓦」は588年（崇峻天皇元年）に百濟から僧や寺大工と共に瓦博士が来朝し、596年（推古天皇四年）に法興寺（飛鳥寺）が造立された。このとき葺かれた瓦が日本最初の瓦で、1400年以上の歴史がある。当初は、平瓦と呼ばれる雨水を受けて流す谷瓦と、その間をふさぐ素丸瓦（半円筒形の瓦）と呼ばれる山瓦の組み合わせで葺かれ「行基葺き」と呼ばれている。法興寺が移築されたのが現在、奈良市にある元興寺で、行基葺き瓦が残っている。行基葺きは本瓦葺きの原型であるが、ヨーロッパの屋根に見られるスパニッシュ瓦もルーツは同じようで、シルクロードでつながっていたのではないかとするとロマンが感じられる。



スパニッシュ瓦屋根：サン・ピエトロ大聖堂

行基葺きは、瓦の上に次の瓦をかぶせる葺き方なので、ズレ易いことと形が好まれなかったようで徐々にすたれたといわれている。

その後、山瓦がズレないように改良されたものが「本瓦葺き」である。これは、山瓦の両端が同じ寸法で、接合部分が一回り小さな半円筒状（玉口）となっている。下から見れば重ねた丸瓦が一本の筒のように見える。



元興寺では下の写真のように両方の葺き方をみることができる。

本瓦葺き ← → 行基葺き



元興寺

江戸の大火と瓦の普及

寺社や城郭・武家屋敷などにしか使用を許されていなかった瓦葺きが、民家に普及したのは、江戸時代中期のことである。度重なる大火に悩まされた江戸幕府により、草葺きや板葺きが普通であった民家に、火除け瓦として、屋根に平瓦を葺くことが許され